ティーチング・ポートフォリオ

史学科　　高津　純也

（記入日：　2024 年　　9 月　　30 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

アジア史研究入門(1)（1 年前期必修）、アジア史概説(1)（2 年後期必修）、アジア史演習(1)（3 年選択必修）、東アジア史（3～4 年後期選択必修）など

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

日本を含む上位ブロックである東アジア世界の歴史文化社会について学ぶこと、また自ら調べ自ら考えること、その結果をまとめて発表や討論に臨むことなどによって、現在および未来をよりよく生きるための教養、および社会で活躍するためのスキルを身につけることを目標とする。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

「アジア史研究入門(1)」においては、課題提出の機会において、知識を問うような課題や正解を求めるような課題ではなく、学生自身が自らの興味関心に関連する書籍を選択し、その内容を要約させるような課題を与えた。これは、歴史事項についてその知識量を競うのではなく、その意義や背景・影響まで含めて理解し、また自ら考察するという歴史学の本質に馴染み、高校の歴史の授業スタイルから思考法を転換することを促すという目的に基づく。「アジア史演習(1)」においては、漢文資料を参加者で輪読し、かつ毎回読んだ範囲内にて言及された事項について次回までにレポートさせるという授業形態の中で、講読・レポートのいずれについてもグループワークを導入し、参加者相互で協力して進展させることを促した。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

「アジア史研究入門(1)」においては、受講者のほとんどが、自ら選択した書籍の内容についてその全体を要約できていることを確認できた（エビデンス 1)。「アジア史演習(1)」においては、グループ内で協力して課題に当たることで、内容が濃く誤りの少ないレポートを作成していることを確認できた（エビデンス 2)。またそのレポートについても漢文資料読解についても、個人個人で作成するよりも完成度が高いものとなった、という感触を持っている。それはエビデ

ンスを伴うものではないが、本ゼミにおいて例年類似のカリキュラムを実施してきた経験、およびゼミ参加者の個々の実力を入学時から他の担当科目を通じて把握してきた経験に基づく。

５　今後の目標（これからどうするか）

「アジア史演習(1)」については、毎年度後期は、各回一名ずつ輪番で、自らの興味関心に応じて自由にテーマを選択してレポート発表させるという形式を取っている（上の３４に記したのは前期のカリキュラム）。テーマ選択の条件は「東アジア史に関連する」という点のみで、自由度が高く、そのような状況下で自ら調べ自ら考える訓練を行うのが狙いである。しかしかつて、発表者以外の参加者が、ともすれば無関心に授業時間を過ごしてしまうケースがあった。また発表者も、調べてきてレジュメを作成した時点で作業は完了、という雰囲気になりがちであった。そこで緊張感を保つため、それぞれの発表に対してランダムに２～３名を指名し、発表中で気になった点や不明だった点について質疑させるという手を取った。また各回の発表において教員が看取した不備な点について、次回までの追加レポート作成と発表を指示することで、一回のレジュメ作成では発表が完結しないような流れとした。それは一定の効果を上げたものの、やはり幾ばくかの強制を伴うことになり、まだ改善の余地があると感じた。ゼミの運営に関しては今後とも不断の改善を図ってゆきたい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. 「アジア史研究入門(1)」学期末レポート（提出後採点・添削）
2. 「アジア史演習(1)」各回の発表レジュメ（提出後教員保管）

ティーチング・ポートフォリオ

大西　克典

（記入日：　2025 年　2 月　6 日）

1　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

西洋史概説(2)、文献講読演習、西洋史演習(2)、史資料演習、交易の歴史、ヨーロッパ中近世史、文献講読(2)

2　理念（なぜやっているか：教育目標）

・西洋史に関する基礎的な知識を身に着けさせるため

・学生自らが情報を主体的に獲得し、歴史的な知識に裏打ちされた考察を行うことができるようにするため

3　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

・学生の理解度や知識の定着度を測るために、Forms を用いた小テストやコメントシートの記入などを行った。(西洋史概説(2)、歴史学(2)など)

・Teams 上に資料を上げ、講義資料をいつでも簡単に閲覧することができるようにした。(西洋史概説(2)、西洋史演習(2)など)

・小テストを行い、学生の理解度の確認や知識の定着を促した、(西洋史概説(2))

・また、西洋史演習(2)や文献講読演習等では、学生に質問を促し、教員の側からも問いかけるように心がけた。

4　成果（どうだったか：結果と評価）

・西洋史概説(2)では学習・研究を促すために小テストを行い、成績があまり振るわない学生も授業内容を振り返る機会を設けた。しかし、一部の学生は小テスト自体を嫌う傾向にあり、テストを機会にそれまでの授業内容を振り返ったのは、成績的には上位の学生が中心であった。

・西洋史演習(2)や文献講読演習等では、学生に積極的に質問を促したが、うまく質問ができない学生も見られた。

・全ての資料をオンラインで配布した場合、試験の時にあらためて持込のための資料を学生が印刷する必要があり、負担となっている。試験の形態を変更す

るなど、修正する必要があると思われる。

５　今後の目標（これからどうするか）

・Teams や Forms などを用いた授業資料の配布やアンケート・課題の設定を続ける一方、それらを用いた事前・事後学習へと導く工夫を行う必要がある。

・特に成績の振るわない学生や明らかに基礎知識が不足している学生については、基礎的な部分からフォローアップする機会を設けたい。

・疑問点を言語化することは今後も必要になると思われるので、質問を考えてもらう機会は各学年の授業で設けたい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. 西洋史概説(2)講義資料
2. 交易の歴史講義資料
3. 西洋史演習(2)資料
4. ヨーロッパ中・近世史講義資料
5. リアクションペーパー及び小テスト(西洋史概説(2)、交易の歴史など)

ティーチング・ポートフォリオ

（記入日：2024 年　　9 月　　16 日／史学科　辻　明日香）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

基礎演習(1 年前期必修科目、2 単位)、文献講読(1)(2 年前期選択必修科目、2 単位)、アジア史演習（2）（3 年通年選択必修科目、4 単位）、史資料演習（4 年通年必修科目、4 単位）、アジア史研究入門（２）（１年後期必修科目、2 単位）、アジア史概説(2)（2 年前期必修科目、2 単位）、西・南アジア史（3-4 年後期選択必修科目、2 単位）、観光文化（アジア）、観光歴史学、世界遺産で旅する(共通教育科目、2 単位)など。

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

各学年の演習においては、学生の読解力と論理的思考のトレーニングに力を入れている。自ら問題を具体的に設定し、網羅的に資料を収集し、それを報告するというプロセスを通じて、自ら調べ学ぶという態度を身につける機会を提供する。講義においては、学生が歴史と現代世界に対する広い視野と深い洞察力を養うこと身近な問題と歴史上の出来事の関連性を探りながら学ぶことを目標としている。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

講義形式の科目では、学生に考えたこと調べたことを書いたり、発表したりする時間を設けている。講義を受けている他の学生がどのようなことを考えているかということから刺激を受け、さらなる学びにつながっていると考える。演習では自ら調べ学ぶという行為から達成感を受けられるよう、それぞれのレベルやペースに合わせながら課題を提案している。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

前期開講科目においては、例えばアジア史概説(2)ではリアクションペーパーの成果もあり(エビデンス 1)、歴史の流れを説明する記述問題に良い解答が相次いだ。1 年次の入門講義よりも格段の進歩が見られた。授業アンケートにおける反応も良好であった（エビデンス 2）文献講読(1)では少人数で英語文献を毎週読み進めたため、各自予習が大変であったようであるが、途中から手応えを感じたようである。基礎演習においても最終回の授業にて発言やレポート作成に対する苦手意識を克服しつつあるというコメントを複数得た。

５　今後の目標（これからどうするか）

　他の教員の授業実践の方法からも学び、学生を飽きさせないような取り組みをしたい。また、学生については課題を提出したというところにとどまらず、授業の予習復習や調査を自ら積極的に取り組むよう促していきたい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

各授業のアンケートシート (エビデンス 1 非公開)

授業評価アンケート（エビデンス 2）

ティーチング・ポートフォリオ

原田晶子

（記入日：2025 年 2 月 25 日）

１．教育の責任

講義科目　西洋史研究入門（2)、西洋史概説（1)、ヨーロッパ精神史、外国女性史、観光文化（ヨーロッパ）

演習科目　西洋史演習（1)、史資料演習、文献講読演習、コミュニケーション能力基礎演習、基礎ゼミナール、文献講読（２)、

２，理念

史学科の西洋史担当教員として、高校までの「暗記科目」とのイメージとは異なる「歴史学」を伝えるように努めています。本学の史学科に進学する学生の多くは日本史に関心があり、西洋史への興味は必ずしも高くありません。そのため、まずは西洋史に関する基礎的な知識の習得を目指していますが、同時に、「いつ、何が起こったか」だけではなく、「なぜ、その時にその事件が起こったのか」背景について考えるよう促しています。そして学説の変化についてもできるだけ触れるようにし、今授業で伝えている内容も決して「絶対」的な教えではなく変化する可能性があるため、最終的には＜自分の頭で考えること＞が重要であると伝えています。史学科で学んだ歴史の知識は、学生が卒業後の人生でほとんどの場合直接役に立つものではありませんが、史学科の４年間で「考えること」を学ぶことこそが、社会人生活や日常生活においても最も応用の利く重要なことであると考えるからです。

３．方法

講義科目　事前に Teams に授業資料を上げ、各自の西洋史に関する知識量に応じた予習を促しています。その際、重要な部分については空欄で配信しており、授業時も集中するよう工夫しています。

また最近の学生は視覚情報に強く、具体的なイメージが湧くと理解したと考える傾向があるので、図像資料（絵画や地図、年表、家系図等）や映像資料を多用し、学生の授業理解度が深まるよう工夫しています。

さらに講義科目では、学生の理解度を確認するため、授業の最後に課題としてコメントシートの提出を求めています。Teams の Forms より提出させているため、ほとんどは各自にコメントを付けて返却していますが、重要と思う質問や複数人が疑問にもった事柄に関

しては、次回の授業の冒頭で全員に対して回答するようにしています。このような方法で、講義科目であっても一方方向の授業にならないよう工夫しています。

演習科目　最初にレジュメのひな型を示し、報告の際に問題提起－議論－結論をきちんと設定させ、論理的に思考する訓練となるよう心掛けています。

また演習科目では、全員の積極的な授業への参加を促すため、報告に対して出席者は必ず質問することを義務づけています。そして質問に対してはまず報告者に応えさせることで、報告者の入念な準備を促しました。実際、授業の回数を追うごとにリサーチの精度が上がっているとの手応えがあります。

４，成果

講義科目

・西洋史研究入門（1）　１年生の史学科専門科目として必須の授業になります。本学科の場合、日本史に興味があり進学する学生が多いため、西洋史への理解度を高める重要な授業であると認識しています。しかし、授業アンケートの結果、例年と比べ理解度や満足度が低下しており、今後の改善が必要な授業となりました。毎回授業後にコメントシートの提出を課題として求めており、若干例年に比べ授業内容の浸透度に問題のあるとの印象は抱いていましたが、アンケート結果を見るまでは現状をきちんと把握できておらず、大いに反省しております。自分自身としては例年通りに授業を行っていたとの認識でしたが、コメントシートの分析精度を高め、学期途中からでもより学生のレベルに合わせた授業内容に変化させる工夫が必要であると痛感いたしました。学期途中に足を痛め、歩行時の肉体への負担から例年より疲労感が強く、学生の求める水準に合わせられなかったことも要因の一つと考えてはおりますが、体調不良の折には、それに合わせた工夫が必要と痛感しました。

演習科目

演習科目では、参加者全員に発言を義務付けたことで、回を追うごとに質問のため履修者全員が事前に文献を精読するようになり、また質問に答えるため報告者のリサーチの精度も上がっていったとの手応えがありました。

・西洋史演習（1）　３年生のゼミに当たる授業です。来年度のサバティカル取得の可能性があり、学生には４年次の卒業論文の指導はできない旨を伝えていたため、例年より大幅に履修人数が減りましたが、その分、丁寧な指導ができたと考えております。とくに後期は教科書指定した『ドイツの歴史を知るための 50 章』（森井裕一編、明石書房）から、関心のある出来事・事象が書かれている章を選び、簡単な要約後、本文を読んだ中から生じた疑問から問題提起させ、リサーチ内容とそれに対する考察結果を 30 分以上で報告す

る研究発表を行わせました。当初は問題設定に苦しむ学生が多く、本文中に出てくる単に自分の知らない出来事について調べたことを発表するだけで、すぐに報告が終わってしまう学生も多かったのですが、少人数であったことが幸いし、3 回目ぐらいになると「なぜ」「どのように」という深みのある問題提起から、30 分以上かけた濃い内容の報告がおこなえるようになりました。また、一度の報告で利用する文献数も増え、難解な学術論文にも挑む姿勢がでてきました。本授業で学んだことが来年度の卒業論文執筆時に生かされることを願っております。

５．今後の目標（これからどうするか）

喫緊の課題は、「西洋史研究入門（2)」の授業でのクラス全体の理解度を高めることにあります。PowerPoint で作成した授業資料の内容、授業内での説明の仕方、Teams での課題に対するコメントの仕方などの見直しを行う予定です。

授業方法の手直しは行いますが、自らの教育理念に変更はありません。自分が学生の頃、今後のインターネットの普及で自宅にいながら世界中のことが調べられる時代が来ると大いに期待していましたが、この予想は裏切られました。玉石混合の情報の渦に溺れ、むしろ慎重に行動しなければ以前より信頼できる情報を得ることが困難になったと思うほどです。また未曽有の少子化により今後日本社会がそのように変化するかも予想できない未来に向け、ますます自分の頭で考えることが重要になるはずなのですが、AI の登場により、今後は自分の頭で考えず作成した文章を提出する学生が増えるのではないかとも危惧しています。そのような環境の中、何事に対しても自分の頭で考えるよう導いていくことには今まで以上の困難さが予想されますが、それでも人文系学問の大学教員の大切な役目は、信頼できる情報を探し出し、それらを根拠に自分の意見を形成していけるよう導くことだと信じています。そして本学科の場合、過去に起きた出来事を参考にしながら、何を選択すればどのような未来があり得るのか想像できるような人材を育成し、卒業生たちが少しでも不確かな時代を生き抜ける強さを在学中に得ることができる手助けができればと考えています。

６，エビデンスとなるもの

・講義科目（「西洋史研究入門（2)」「西洋史概説（１)」「ヨーロッパ精神史」「外国女性史」「観光文化（ヨーロッパ)」の授業資料
・上記科目の毎回の課題（Teams から提出されたコメントシート）
・演習科目（「西洋史演習（1)」「史資料演習」「文献購読演習」「コミュニケーション能力基礎演習」「基礎ゼミナール」）で配布した史資料。
・演習科目での学生の報告レジュメと学期末レポート

ティーチング・ポートフォリオ

史学科　　堀 部　猛

（記入日：2025 年２月 27 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

2024 年度の担当科目は以下のとおり。

通年

日本史演習（１）	（専門教育科目・選択必修）
史資料演習	（専門教育科目・必修）
博物館実習	（専門教育科目・選択）

前期

日本史概説（１）	（専門教育科目・必修）
博物館資料論	（専門教育科目・選択）
博物館経営論	（専門教育科目・選択）
博物館教育論	（専門教育科目・選択）

後期

日本史研究入門（２）	（専門教育科目・必修）
日本古代史	（専門教育科目・選択必修）
博物館概論	（専門教育科目・選択）
博物館展示論	（専門教育科目・選択）
博物館資料保存論	（専門教育科目・選択）

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

担当科目は、博物館に関する専門教育科目と、歴史学に関する専門教育科目に大別される。

前者については、人文系の地域博物館の多様な実践例を踏まえ、学芸員として必要な知識・技能を身につけることを第一の目標としている。学芸員資格を取得しても、卒業後直ちに博物館や自治体に就職する学生は限られる。単に資格の取得にとどまらず、博物館が社会のなかで果たすべき役割を理解し、地域社会に貢献できる人材の育成も目標としている。

後者の歴史学に関する科目については、遺された史資料をもとに過去を論理的に推察する力と、それをもとに現代と未来を見つめ、諸問題に対し主体的に考える力を養うことを目標としている。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

〇博物館に関する専門教育科目

「博物館法施行規則」に定める科目を体系的に履修できるよう、カリキュラムが設定されている。１年次に履修する「博物館概論」に始まり、２～３年次で展示論、資料論、経営論、資料保存論、教育論などで各論を学び、これらの履修を経たうえで「博物館実習」を履修する。一貫した体系のもとに個々の科目が位置付けられており、基礎的・理念的領域から実践的な技能へと段階的に習得していくことを意識している。

そのために、おもに以下のような方法で行った。

①Teams の活用

事前に Teams のファイル機能を利用して授業資料を配信し、予習を促している。資料画像などの視聴覚資料を増やして興味関心を高められるようにするとともに、重要な部分については空欄で配信し、学生が授業中に記入しながら集中して受講できるよう工夫している。

②課題の提示

博物館展示で議論の分かれる問題や、博物館の先進的取り組みなどについては授業中に「課題」を提示し、考えをまとめて報告してもらい、また他の学生の意見から学ぶ機会を設けている。

③実践的・具体的な教材の提供と体験

長い博物館勤務の経験で得たことをもとに授業は実践的であることを旨とし、実際の博物館で使用する様々な用具や資料を用意し、触れてもらうことを重視している。特に「博物館実習」では、掛け軸や巻子の取扱い、資料の梱包やそのための梱包具の制作、調書の作成など講義と実技を織り交ぜながら実践的に進めている。

④丁寧なリアクション

学生の理解度を確認し、疑問に思ったことを質問できるようコメントシートの提出を求め、次回の授業の冒頭でその講評と質問に答え、補足説明することで双方向の授業となるよう心掛けている。

〇歴史学に関する専門教育科目

講義形式の科目と、学生が調べて報告する演習形式の授業に大別される。

①Teams の活用

上記の「博物館に関する専門教育科目」と同様に、事前に Teams のファイル機能を利用して授業資料を配信し、予習を促している。文字情報に偏重することがないよう、実際の遺跡や資料の画像などの視聴覚資料を多用している。

演習形式である「日本史演習（１）」では、前期・後期に課したレポートの作成・提出に Teams の課題機能を利用し、個別にコメントを付して返却した。

②史料読解の訓練

演習科目のうち３年生が履修する「日本史演習（１）」では、ほとんどの学生が初めて触れる史料（『令義解』）の輪読にスムーズに移行できるよう、文献や関連史料の調べ方について教員による模範報告を示しながら丁寧にレクチャーした。

③実践的な指導

４年生が履修する「史資料演習」では、卒論作成に向けて夏季に章立て案について指導し、課題（問い）の提示から結論に至る論旨の構成力の育成に重点をおいて指導した。

④丁寧なリアクション

コメントシートの利用は、上記の「博物館に関する専門教育科目」に概ね同じ。演習形式の授業では、準備段階で報告のポイントや調べるべき史料を事前に学生と協議・確認し、報告準備にあたっては疑問に思ったことなどをあらかじめ質問するよう促した。質問には遅くとも翌日には返信し、報告者にとってより達成感の高い学問経験となるよう心がけた。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

以上について、教員としての自己評価と授業評価アンケートから導かれる結果と評価は以下のとおりである。

〇博物館に関する専門教育科目

①「Teams の活用」について。概ね学生の理解の向上に有用であると評価している。スムーズに授業に入れる効果も大きい。

②「課題の提示」について。博物館が直面する諸課題をめぐって主体的な学習ができ、その効果は大きい。課題提示の回数や取り上げる問題を増やす必要性を認識している。

③「実践的・具体的な教材の提供と体験」について。学芸員資格の取得には、「博物館実習」の履修が必要になる。夏季休暇中には１週間～10 日間ほど実際の博物館で「館務実習」を行う。実際の資料に触れる機会が多く、かつ学生にとって緊張度の高い「館務実習」に向け、前期の「博物館実習」の授業で資料の取扱いの実務と心構えを重点的に学ぶことで、スムーズに「館務実習」に向かうことができている。

④「丁寧なリアクション」について。授業冒頭で、前回授業で回収したコメントシートの講評や質問への応答を行うことでより授業への理解が深くなっている手応えがある。一方で、コメントの記載が主体的な学習に結びついていない学生もしばしば見受けられ、より丁寧な指導が必要との認識をもっている。

〇歴史学に関する専門教育科目

①「Teams の活用」について。上記の「博物館に関する専門教育科目」の同項目に概ね同じ。演習形式ではレポートへのリアクションを、個々の学生の到達度にも合わせな

がら指導を行うことができた。

②「史料読解の訓練」について。演習科目（日本史演習（１））では、学生の報告に対し、教員側も訓読文を毎回提示し、読解のポイントを示すことで、史料の読解力が回をおうごとに向上していった。

③「実践的な指導」について。４年生の「史資料演習」では、先行研究から読み取るべきポイントをあらかじめ指定し、そのフォーマットに沿って整理して報告をしてもらった。漫然と「読む」「まとめる」ことで終わらず、学術論文とはどのような要件を備えているのかを読み解くことが、卒業論文作成の基礎の形成に結びついたと評価している。

④「丁寧なリアクション」について。講義形式の授業については、上記の「博物館に関する専門教育科目」の同項目に概ね同じ。演習形式の授業については、報告の準備途上で生じた疑問を事前に尋ねてくる学生が増え、充実した報告に結びつくことが多くなったと評価している。一方で、十分な報告準備ができていないケースもあり、全体をどう底上げしていくか、雰囲気の醸成が課題でもある。

５　今後の目標（これからどうするか）

概ね 2024 年度はシラバスに沿って授業を進行できていると評価している。一方で、「歴史学に関する専門教育科目」のうち講義科目では、授業評価アンケートで授業の内容は興味深いものの、スライドの進行速度が少し速く、スライドの前後関係がわかりづらい時があった、との声も寄せられた。こうした声に対応できるよう、テーマと構成がより明確な授業資料の作成を工夫したい。

「博物館に関する専門教育科目」については、カリキュラムの体系を意識し、3－4 年次の「館務実習」に学生が自信をもって臨めるよう、実践的な授業展開の継続と充実に努めたい。今般の博物館法の改正では、「地域の多様な主体との連携」が新たに盛り込まれており、博物館の専任スタッフとならなくても、ボランティアや市民学芸員、同好会への参加など、多様なかたちで地域の博物館の運営に関わることが今後一層増えていくことが予想される。学芸員資格の取得を目先の就職の問題に止めず、ライフステージという大きな枠のなかでその意味を捉え、豊かな人生につながるよう学生に伝えていきたい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

１　講義科目の授業資料。
２　演習科目（日本史演習・史資料演習）で配布した資料。
３　博物館実習での配布資料及び学生が提出した授業ノート
４　コメントシート
５　演習科目での学生の報告レジュメ、レポート

ティーチング・ポートフォリオ

学科：史学科　氏名：志村 瑠璃

（記入日：2025 年 1 月 31 日）

1　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

【図書館に関する専門教育科目】

図書館概論, 図書館制度・経営論, 図書館サービス概論, 情報サービス論, 情報サービス演習(1), 情報サービス演習(2), 図書館情報資源概論, 情報資源組織論, 情報資源組織演習(1), 情報資源組織演習(2), 図書館情報資源特論, 図書・図書館史

【共通教育科目】

情報リテラシー, キャリア・プランニング III(2), キャリア・プランニング IV(1), キャリア・プランニング IV(2)

2　理念（なぜやっているか：教育目標）

図書館について学ぶことを通して、社会における共時的・通時的な知識の循環について検討できるようになることを目指している。知識の幅広さについて知ることを通して、情報の利用に関わる実践的な技術を身につけることを目標としている。

3　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

全科目において、授業終了時には毎回リアクションペーパーとして感想や質問の提出を求め、学修内容を見直す時間を設けた。特に重要な質問や興味深い意見については、次回授業の冒頭で匿名で全体に共有し、多角的な視点の育成を図った。

講義科目では、学生が授業内容に注意を向け続けられるよう、重要な用語や概念を空欄とした穴埋め形式の配布資料を用いた。全 15 回の折り返し時点である第 8 回目には、専門用語の理解度や基礎的な概念の応用力を確認する小テストを実施し、学生が基礎的な用語を確実に理解できているか確認するとともに、学修内容を振り返る機会を設けた。また、「図書館情報資源概論」では、実際に大学図書館で各種資料と蔵書構成を確認する演習課題を設定し、図書・雑誌・

参考図書などの特徴を実物で確認させることで、講義内容の実践的な理解を促した。

演習科目では、まずは図書館における実践例を最終的な到達目標として示し、その後に段階的な課題を設定した。他にも、以前に取り組んだ課題と類似の演習を意図的に織り交ぜ、学生が自身の成長を実感できるよう工夫した。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

いずれの科目においても、授業評価アンケートにおける教材の利用に関する質問にて、大多数の回答者から「効果的」あるいは「どちらかというと効果的」との回答があった。講義科目の穴埋め形式の配布資料も、学生から一定の評価を得ていると考えられる。一方、演習科目では、約 3 割の学生において、講義科目で学んだ知識を実践的な課題に応用することに困難を示す様子が見られた。特に、参考図書を用いる演習をおこなう「情報サービス演習(1)」において、基礎的知識の実践的な運用に時間を要する傾向が確認された。

５　今後の目標（これからどうするか）

講義科目と演習科目の接続を強化する。具体的には、講義科目において図書館資料の実物に接する機会を増やし、基礎と実践の結びつきを意識づける。また、演習科目の初回に講義科目の重要概念の確認テストを実施することを検討している。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

・リアクションペーパー
・学生から提出された演習課題等の成果物
・2024 年度前期授業評価アンケート
・2024 年度後期授業評価アンケート

ティーチング・ポートフォリオ

学科：史学科　氏名：長﨑　健吾

（記入日：2025 年 2 月 24 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

文献購読（１）（２年前期選択必修科目・２単位)、日本史概説（１）（２年前期必修科目・２単位)、日本史研究入門（１）（１年前期必修科目・２単位)、史資料演習（４年通年必修科目・４単位)、日本史演習（２）（３年通年必修科目・４単位)、コミュニケーション能力基礎演習（２年前期必修科目・２単位)、日本中世史（３～４年前期選択科目・２単位)、日本史研究入門（２）（１年後期必修科目・２単位)、日本女性史（２）（３～４年後期選択科目・２単位)、歴史学（後期共通教育科目・２単位)、文献購読（２）（２年後期選択必修科目・２単位)、文献購読演習（２年後期必修科目・２単位)、古文書学（３～４年後期選択科目・２単位）

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

演習においては学術的な文献の批判的読解力、歴史学研究に必要な史料読解力、およびこれらを伸ばす過程において学生相互で議論する力の育成に力を入れている。選択科目の授業においては、過去の社会について学ぶなかで現代社会の問題の根源を洞察する力を養うことを目指している。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

講義形式の授業においては各回の授業後にコメントシートを提出してもらい、寄せられた疑問や感想のうち特に重要なものを次回の授業冒頭で紹介し、発展的な解説を加えている。演習においては各学生に毎回最低１度の発言を義務付け、報告内容が不十分な場合は追加の課題を課して次回の演習冒頭で短い報告を課している。取り上げる題材（論文や史料など）の決定においてはいくつか候補を挙げつつ学生の意見を聞きながら決定し、演習が学生の興味関心に沿ったものとなるよう努めている。また、グループワークやペアワークなどアクティブラーニングの機会を適宜もうけている

４　成果（どうだったか：結果と評価）

グループワーク等は盛り上がり、おおむね好評だった。授業への要望としてはスライドが見づらい、内容が多いなので意見が寄せられた。

５　今後の目標（これからどうするか）

授業で扱う内容を精選するとともに、授業内での質疑やグループワークを通じたやりとりなど、学生との対話を通じた学習の比重を高めて行きたい。文献購読や演習において史料をあつかう際は、あらかじめ中世漢文の語法などについてもう少し簡潔かつ体系的に教える方法を考えて行きたい。また、1 年・2 年次の講義内容と 3 年演習の内容につながりを持たせ、学生が学習の成果を実感できるよう工夫していきたい。また、衣食住など生活に密着したテーマに関心を持つ学生が多いようなので授業内容に取り入れていきたい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

・講義形式の授業で毎回課しているコメントシート（非公開）
・学生から提出されたレポート等の成果物
・2024 年度前期授業評価アンケート
・2024 年度後期授業評価アンケート